

天文学とプラネタリウム

第85回



www.tenpla.net



高梨直紘 (東京大学)
平松正顕 (国立天文台ALMA推進室)

今月のお題

お酒と宇宙に酔えるパブ



お酒を飲みながら宇宙の話に花を咲かせる。そんな場所「アストロノミーパブ」が、東京三鷹にあります。

スカイプラネタリウム展II六本木ヒルズで開催中。

科学をネタにお茶を飲みながら気軽な雰囲気では会話をするサイエンスカフェが、各地で開催されています。私たち天プラでも、2005年に札幌で最初のサイエンスカフェを開催して以来、喫茶店はもちろん美術館や飛行場など様々な場所でサイエンスカフェを企画してきました。講演会のような一方通行の情報伝達ではなく、講演者と参加者が入り乱れて会話するというのがサイエンスカフェの特徴ですが、そうした自由な雰囲気を作り出すのはいつも簡単というわけではありません。進行役が上手に合いの手を入れたり参加者に発言を促したりすることもあるわけですが、それだとそもそも「自由な雰囲気」という前提が成り立っていないような気がします。

では自由な雰囲気を作るにはどうするか。国立天文台の本部がある三鷹で見いだされたひとつの解は、お酒を入れるということでした。三鷹ネットワーク大学の講座の一つとして国立天文台が協力している「アストロノミーパブ」はこうして生まれました。そしてその記念すべき60回目が先日行われ、筆者の一人(平松)が出

演してきました。

このパブは講演者2人の対談が1時間、そのあと立食形式の「パブタイム」が1時間の構成。対談相手には元国立天文台天文情報センターの室井さんを迎え、写真をお見せしながらチリやオーストラリアから見上げる夜空についてのお話をしました。北の空に昇る太陽、北半球とは逆側が欠けて見える三日月、そして太い天の川と南十字星、大小マゼラン雲。2012年、日本横断金環日食の半年後にケアンズで皆既日食が見られることを紹介して、対談の時間は終わりました。そしてパブタイム。「参加者一人当たり5分以上講師を独占しない」がこのパブのルールですが、それを守ることが難しいほど皆さん熱心に質問を投げかけてくださいました。このパブには常連さんも多いのですが、そんな常連さんも初参加の人もチリの星空やチリに建設中のALMA望遠鏡計画の進捗には興味深々のご様子でした。

このアストロノミーパブのすごいところは、その常連さんたちのネットワークです。1回の定員が20名のため抽選に漏れる方もいらっしゃるのですが、有志で2次会を企画したり、講



アストロノミーパブで出された「アルマのフライ」(さわらのフライ)。このパブではオトナな(オヤジ的?) ネーミングの料理が出されます。

演会に連れ立って出かけたり、果ては自分たちで講師を呼んでサイエンスカフェを開催したり。一方通行の講義からの脱却がサイエンスカフェやアストロノミーパブの大きなテーマですし、「科学を文化に」という言葉もよく聞くのですが、自発的な働き掛けをするようになるまでコミュニティが育ってこそ文化になると言えるんだろな、と思います。そんなコミュニティの元になったアストロノミーパブ、やっぱり着眼点は間違っていなかったということでしょう。